

韓 昇憲 (ハン スンヒ)

韓国出身

東京外国語大学 総合国際学研究科世界言語社会専攻 博士課程

自分自身と向き合う

最近、コロナ渦で人と会う機会が普段より少なくなり、一人で暮らす時間が長くなった。私は、生活の大半を、興味のあるテーマの学術的なシンポジウムへの参加や志を同じくする仲間たちとの勉強会への参加準備に使っていた。しかし、現在ほとんどのシンポジウムがオンラインで行われている。また、Zoomで行っている勉強会もあるが、その他の勉強会はコロナ事態が落ち着くまで延期することになった。一生懸命に勉強をしても意見交換を行う機会がないので、勉強への意志・意欲が弱まっていくのである。

ここで、考えてみたいものがある。勉強会の中止などで学問に対する意欲が下がるということは、自分のなかで誰からも評価されたいという気持ちがあることを意味する。評価されたい欲望自体は悪いものではない。誰だって持っている感情であり、研究を続けるモチベーションとなることもあるだろう。しかし、評価されたい欲望の裏に隠されている感情も見据える必要がある。誰からも評価されたい気持ちというのは、裏を返せば、誰よりも優秀である優越感を感じたいことにもつながる。ここまで話が進むと、優越感を感じるために勉強をしているかのようにも考えるようになる。

なぜ、そこまで追い詰めて考えるようになったかという、最近、誰のための、何のために私は勉強をしつづけているのか、ということについて考えこむことがよくあるからである。最近、どこにも行かず、一人でごろごろする時間

が多くなってきたから、しばしば今までの自分がやってきたことを振り返る時がある。言い換えれば、自分自身と向き合う時間が長くなったということである。勉強会ができなくなったことについてなぜ、それほど悔しく思ったのか、もしかして、誰かに見せるための勉強をしてきたことではないのかということに気づいたからである。本来、誰も教えてくれない自分自身の問いに対する答えを探すために勉強をはじめたはずである。一刻も早くコロナ渦が収まることを願いながらも、コロナ渦は人々の移動を統制しているようだが、このように自分自身の研究と向き合う機会を与えたという点では得るものもあるようだ。